

が、かなり、かかわりあいをもつ。そのことを無視し得ない。

レポーターに対しては、1つの研究のテーマの発表、批判より、未来に向っての展望、研究のデザイン、発展の可能性などを語ってもらうように依頼してある。

現在、青年心理学に関する数多くの調査、研究、資料などが発表されている。ここで Ausbel, D.P. がやったような、諸資料、諸理論の統合をはかり、その上で、青年心理学の発展の方向を探る必要があるのではないか。

現在、青年心理学が、かかえていると思われる問題を思いつくままにあげると、● 青年心理は児童心理と同じ方法論をとるべきか、② 世代の問題をどんな風に取り入れるか、追いきれるか、③ 自然科学的、実験的手法、因子分析などは、本当に有効か、実証できるか、その対極にある現象学的方法の有効性、将来性等の問題、④ Spranger, E. はいまでも生きていくか、⑤ 青年心理学は発達心理学か教育心理学なのか、⑥ 次のような概念は果たして青年心理学の概念として、分析の単位として有効か否か、性ホルモン、欲求、動機、孤独、感傷、恋愛、感情、劣等感、identity 疎外生きがい……。

以上のようなことを、1つの参考として、お考えいただければと思います。

つづいて3名のレポーターから、おおよそ次のような報告、提案がなされた。

### 現代青年のレジャー問題

——社会心理学的アプローチ——

山口茂喜

現代青年のレジャー問題を考える第一歩は、青年のレジャーの実態を正しく把握することである。この点に関して、今までの青年心理学者のとってきた方法は、アンケート調査を中心としたものであり、どうしても生の実態とは、かけはなれた表面的なものになり勝ちであった。それ故、青年心理学者自身が青年達の中へ入り込んだ生態学的研究法を確立する必要があるのではなかろうか。その学問的モデルの1つを京大のサル学の人達に見出すように思う。すなわち、サルを実験室につれてくるのではなく、逆に研究者自身がサル一群の中に入って、研究をすすめていこうとする考え方である。学問を書き科学、実験科学、野外科学の3つに分類する川喜多二郎氏の考えに従うと、青年心理学は正に野外科学として位置づけられるのではなかろうか。特に、現代青年のレジャー問題のように未開拓の分野においては、直接、青年たちのレジャーの実態

と接して、その中から問題をくみ上げてくる必要がありそう。例えば、青年たちが集まるデスコティークで、ゴーゴーを踊っている青年達が感じている、全く自由に見える今の社会に対するよりどころのない、やり切れない感、それに気がついていながら、自分では何もできない無力感、この実感は、青年と一諸に行動するときのみ、わずかに共有することのできるものである。このような実感を原体験とするような、青年の側に立った青年の為の青年心理学の研究が、今まで、一番欠けていたことであると思う。

次に、レジャーの問題をとらえる研究者の側の新しい価値観の確立が必要である。なぜなら、戦前に育った人々は、仕事を第1に考える傾向があった。それは、彼等の育った貧しい時代には、仕事をしなくては暮らしていけなかったからである。しかし戦後の豊かな社会に生れ育った現代の青年にとっては、仕事は仕事、遊びは遊び、とはっきり区別するようになってきている。労働時間が減少した分だけ、逆にレジャー時間が増加しており、このレジャー時間をいかに主体的に過ごすかというレジャーの論理が確立されることが必要になってきている。新しいレジャーの倫理が確立しないかぎり、戦前の「小人閑居して不善を為す」という労働の倫理からぬけ出せないからであり、どのような価値観の中で現代青年のレジャー問題を方向づけるかという研究者の側の視点が定まらないからである。

### 現代青年の性の問題

——社会心理学的・発達心理学アプローチ——

福富 護

青年の性を対象にして研究を進めようとする場合、次のことがらを吟味してみることが重要と思われる。

- 1) 青年と青年心理研究者との関係
- 2) 青年心理における通有性
- 3) 青年心理の出発点をどこに求めるか。

1) は「たとえ研究者といえども、自分なりの枠組で青年を見てしまう危険性」を研究者自身がいかに認識するかという問題である。青年期という時期は、全ての研究者が過去において経験しており、そのことが研究者の枠組を作りあげることに、大きな作用を及ぼすと思われる。そのため、研究者は、研究に先がけて各自の経験してきた時代的背景を十分吟味して見ることが必要であろう。

2) は、生身の青年というものが、時代的、社会的要素と無関係に存在し得ず、さらに研究者自身もそれらの要素と独立に存在しえないということから生ずる問

題である。すなわち、通有性としての青年を捉えようとしても、通有性を考えるプロセスの中にも、もう時代性や社会性が入りこんでしまう可能性があるということである。

3) は、青年心理研究の出発点をどこに求めるかという問題で、研究者自身が設定した問題に出発点を置くのではなく、研究者の投じた問題に対して、青年自身がどのような表現をもって研究者に伝えてくるかを出発点にすることが有効と思われる。従来の質問紙による研究は、あまりにも安易に研究者自身の枠組に添った質問が構成されていたことを反省する必要がある。

以上の問題を吟味し、実践するには、まず研究者自身が、できるだけ枠にとらわれずに多くの現代の青年達と肌で接してみることが有効と考えられる。もち論、このことは全ての研究者にとって等しく安易なことではない。しかしながら、青年にとって性の問題は、個人の心理的なものの中で、それだけが切り離されて存在しているものでもなく、自己をどのように捉えるかとも密接にかかわっているものと考えれば、青年とのかかわりは、どうしても無視できない。このことは、青年心理学研究者として、青年に対し何をしたらいいのかという問題でもあり、青年心理学の発展が青年の生成に対して寄与していくことでもある。しかも、この寄与は単に観念時水準で言及されるだけでなく、あくまでも現実への取り組みから具体化されなければならない。従って、青年に対して、どのような伝えかたをしたら、あるいは、どのように性を自分の中で考えていく機会を与えたならば、青年が具体的行動を選択する際に有効な示唆となるかを考えてみる必要がある。このことは青年に対してだけでなく、青年を扱っている全ての成人に対して共通に言えることである。そのためには、どうしても、青年との直接的接触が、成人側の経験として必要になるのではあるまいか。

### 青年の自我の問題

——発達心理学的、現象学的アプローチ——

シュブランガー以来、自我の問題は青年心理学において、重要なものの1つであったことは言うまでもない。しかし、自我という概念の青年心理学における位置づけは必ずしも明確ではなく、論理的である。そこで本提案では、この概念の必要性和有効性をめぐる問題が、結局、青年心理学のあり方を問うということになる。そういう意味で、方法概念としての観点から、考察を展開したいと考える。

青年心理研究の立場としては、次の2つが考えられ

る。1つは“外側から”のアプローチといえる。たえず青年との距離を自覚的に保ち、可能なかぎり客観的な態度で研究しようとするものである。それに対して他の1つは“内側から”のアプローチであって、できる限り、青年にとっての意味を問いただしつつ、理解を深めていこうとするものである。

この後者のアプローチこそ、自我の問題の追求の立場として、ふさわしいものである。というのは、自我という概念は、本来、人間の主体性や能動性を正当に評価し、とらえようとする概念にはかならないからである。その意味で、自我の問題は、青年心理学の一章に自我論を加えるといった問題を越えて、青年心理学を体系づける基本的立場とかわってくる。

この自我心理学的とでもいえる方法論的立場は、現代の青年心理学が当面する最大の課題の1つである統合理論の構築に到る道を開くものである。ただそのためには、実体論的なそれではなく、人間存在の多次元的な側面を統合する機能をその中に包摂する自我論を展開する必要がある。また、そのような自我論は、社会論(環境論)を統合するものでなければならないし、その社会論も、歴史的視点を欠落させた、非歴史的、超歴史的なものであってはならない。自我と歴史的世界との出会いこそ、青年期にはかならないからである。しかも問題は、社会観と、青年観(像)が深くかかわっているということである。つまり、歴史的視点を欠いた社会観のもとにあっては、青年期の自我発達を“成人社会への適応過程”とか“未成熟から成熟への成長過程”ととらえる青年観は生まれても、青年を時代の挑戦者あるいは創造者とみる青年観は期待しにくいのである。したがってまた、そのような青年心理学が、青年の自我がとりくむべき課題を積極的に提出できないのも当然のことかもしれない。そして、当の青年たちが、青年心理学に期待しながら失望し、批判を加えるのも、現代の青年心理学の“後向き”の姿勢ゆえであらう。

今後“前向き”で“可能性”青年心理学を構築する努力が必要である。そのためには研究者自身の「歴史的パースペクティブがまず問われなければならないが、大切なことは、この問題が結局は研究者自身の歴史的アイデンティティの問題に帰着するということである。つまり、研究者の側に、世代的自覚ととりくむべき課題の発見と解決への努力があってこそ新しい青年理解の目が開かれるし、青年の自我の共感を得ながら、それに訴える青年心理学の発展が期待できるのである。その意味で青年心理学は、研究者(成人)と青年の相互理解の場でなければならないし、両者の自我が

## Independent Symposium II

# EXPLORING THE DIRECTION TOWARD THE DEVELOPEMENT OF PSYCHOLOGY OF ADOLESCENCE

Takeshi Sorita (Gifu Univ.)

N.Nishihira (Yamanashi Univ.), the organizer, explained the plan of this symposia as follows.

This symposia was especially organized with younger researchers as central figures, and reporters were required to present their theoretical and practical views as to designs, perspectives and dreams of the future research. Moreover, to focus the discussion, he introduced the subject regarding the necessity of systematizing and theorizing numerous data of investigations and researches presented up to this time.

Reporter, S. Yamaguchi (Okayama Univ.) presented the problem of the leisure of adolescents of today and insisted the necessity to establish method of ecological study, letting researchers themselves be identified with adolescents, because today's study of adolescent had been superficial, far from their actual realities.

Reporter M. Fukutomi (Tokyo Gakugei Univ.) presented the problem mainly regarding to the sex of adolescence and laid stress on the following three points .

- (1) As to the sex, investigators of adolescent psychology were apt to observe adolescence from their own frame of reference.
- (2) When we tried to understand universal image of adolescence, we had to consider that the problem of generation and sociality were necessarily mixed with it.
- (3) We always had to put the starting point of study on adolescence himself.

Reporter R. Yamada (Yamanashi Univ.) presented the problem regarding the method to study were divided into two... one is approach from outside, the other is into inside inquiring the meaning, namely phenomenological method..., and the latter was more appropriate method. He also emphasized that the problem of ego was the central one of adolescent psychology, and man should be understood both as multi-dimensional existence and from the social and historical standpoint.

### Discussions :

The issues debated were :

- (1) Each reporter criticized, the fact that psychologists of adolescence up to date were apt to understand the adolescent from outside aparting from him and insisted that future researches should be carried on getting into the adolescent (or from the view point more closely connected with him).

Counterarguments of rather elder psychologists were that the method to observe apart from adolescence also should be approved, because to get into him did not mean always to speak or behave with him, and to understand adolescent was possible through the phenomenological method... to gaze at him continually and to investigate the meaning of his speech or behavior.

(2) The necessity to establish the systematic theory of adolescent psychology was emphasized, and every participants acknowledged that utmost efforts should be exerted to explore the direction toward the theorizing and systematizing by means of integrating considerable volumes of raw data and results of various investigations.

## Independent Symposium III

### REEXAMING THE PROBLEMS IN EDUCATIONAL MEASUREMENT AND EVALUATION

Chairman: Kunio Murakoshi (Chuo University)

Reporters: Daisuke Mitsui (Railway Labor Science Research Institute)

Hidenori Akiba (Osaka University of Education)

Kuniaki Miyajima (Kyoto University of Education)

Keiichi Saito (Yagiyama Elementary School)

This symposium was planned to achieve the following objectives.

(1) Despite of the criticisms offered by Prof. Mantaro Kido, Prof. Masaki Masashi and Prof. Aritsune Tsuzuki, the problems in educational measurement and evaluation have so far been discussed without considering the goal and value of education. As a consequence, most of the researches on educational evaluation have ignored studying the taxonomy of education, and have shown no concern about the study of teaching and learning. In addition, they have caused much delay in studying the validity of achievement test. Under these circumstances, we attempted to clarify the causes for such trends, and find some clues for solving the problem.

(2) It is difficult to recognize that the research on measurement and evaluation has developed in a relationship closely interwoven into the practice of education. In this symposium, therefore, we intended to establish a much closer relationship between them by criticizing some aspects of the researches in this area.

The contents of the reports submitted by four reporters can be summarized as follows :

*Report 1* (Daisuke Mitsui)

He presented his arguments from the viewpoint of industrial psychology.